

高校生の漢字力の実態についての一考察

——香川県高等学校国語教育研究会編「漢字の学習」を利用して——

桑 島 伸 子

一、はじめに

念願の教師になって、はや十か月が過ぎた。わからないことだらけであるが、中でも生徒の学力の実態がつかみきれないことが一つの大きな悩みでもある。ただなんとなくはわかるのだが、そんなことでは指導のポイントがつかめるわけではないと考え直した。とにかく私の手の及ぶ範囲で、生徒がどんなところを理解していないのかはつきりつかんでみたいと思った。「基礎学力」ということがさまざまに論議されている昨今であるが、今回はその中でも特に言語要素に焦点をあて、漢字の問題に取り組んでみた。高校生の基礎学力の一つの目安として、当用漢字の読み書きがよく引き合いに出されるが、生徒たちはいったいどの程度書け、どこをよく誤るのか。そういう点を把握して私たち教師は漢字の指導をしているのか。今回の考察を通して、考えてみたいのが、このことである。

二、香川県高等学校国語教育研究会編「漢字の学習」の構成と特色

小豆島高校では「漢字の学習」を一年入学時に一人一冊買ひ与え、これに基づいて漢字の指導を行っている。といっても、ほとんどの場合、細かい説明を加えながら指導するわけではなく、数十ページまとめて、あるいは数ページずつ分けて、漢字テストを行い、一年生のおわりにだいたい一冊全部を仕上げるといふものである。香川県

内の県立高校のほとんどが、この「漢字の学習」を利用して漢字テストを行っていることが明らかにされている。「漢字の学習」はこのようなテスト形式の、漢字練習のための独習書といふことができる。

「漢字の学習」は、長文問題編、短文問題編、読み方問題編、参考編の四編から成り、長文問題編は六〇〇字〜七〇〇字程度の文章の中から、漢字（熟語の場合が多い）を十題出題する形式であり、例えば、一ページめは岡山、香川民俗学会編「小豆島の民俗」の一節からコトウ（孤島）、カイシュウ（改修）他十問が出題されている。

短文問題は一ページに四十題出題されており、三十二ページある。十字〜二〇字の出題文の中に漢字（熟語が一題分含まれている。配列は、問題である漢字（熟語の場合はいずれか一字）の五十音順になっている。今回調査を行ったのは、この短文問題が中心となっている。続いて読み方問題編は単語のまま、五十音順に三二〇題、参考編は、(1)当用漢字について、(2)音と訓、(3)漢字の六書、(4)正しい字体、(5)漢語の構成、(6)送り仮名のつけ方、(7)現代かなづかいの要領、(7)当用漢字音訓表の七節の解説からなっている。

「漢字の学習」は独習書としてはかなり有効に使うことができるのではないかと思われるが、実際には、問題を中心に練習され、参考編や長文問題編欄外の解説はほとんど利用されていないのが実情

である。

三、漢字テストの要領と調査のポイント

生徒に対して漢字テストを行い、その結果を集計したが、今回の調査である。まず「漢字の学習」に基づいて、長文問題編では五〜六ページを一回の漢字テストの出題の範囲とし、長文問題を短文につくりかえ、十問を一回の出題量とした。たとえば、第一回のテストでは、「小豆島の民俗」の長文から、「一日五オウフクのパスが通じる。」「アミモトは何軒もある。」という短文の形に直して出題した。このテストは八回、五十四年五月二十日から十一月二十一日までの間に行った。

短文問題編では、一回の範囲を二ページ分八十題とし、その中から十題を選んでテストした。このテストは十四回、五十四年十一月二十六日から五十五年二月一日までの間に行った。

調査の対象は本校全日制普通科一年生の一クラスで、男子十八名、女子二十五名、計四十三名である。学力は一年生の中ではまず平均的なクラスと言ってよいであろう。前に述べた長文問題編の部分のテストでは、細かな調査はできなかったが、短文問題編のテストでは次の要領で調査を行った。

- (1) まず、十題の漢字の正答率を出す。
- (2) 一題中、熟語のうちどの字が誤っているのかを調べるために、一字一字についての正答率を調べる。二字とも正答「○○」上の字が正「○○」上の字が正「×○」誤答「××」と記号をきめて調べた。

(3) 誤例調査をする。

(4) 受験者の得点分布と平均点を調べる。(なお一問一点、正答「○○」だけを得点とする。)

以上の要領で生徒の答案を整理し、漢字テスト一回ごとに次のようなカードを作成した。

第6回漢字テスト (63, 64ページ) 実施 54.12.18

No	漢字	正答率										誤例	
		○	○	×	×	○	×	○	×	○	×		
1	報酬	73.8	16.7	7.1	2.4	73.8	報						
2	縮図	90.4	4.8	4.8	0	90.4	図						
3	批准	61.9	16.7	16.7	4.8	61.9	比/準	准					
4	処罰	76.2	11.9	7.1	4.8	76.2	罪	罰					
5	庶民	71.4	2.4	4.8	9.5	71.4	庶						
6	昭和	95.2	2.4	2.4	0	95.2							
7	沼沢	61.9	38.1	0	0	61.9	沼						
8	詔勅	23.8	66.7	4.8	4.8	23.8	詔	記	照/勅	物	直		
9	錠乳	88.1	9.5	0	2.3	88.1							
10	塗上	90.5	4.8	0	4.8	90.5							
42人	分布	点	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
		人	0	0	2	0	2	4	3	7	11	8	5
		%	0	2.4	4.8	0	4.8	9.5	16.7	16.7	26.2	19.0	11.9

平均点 7.4

調査した漢字は一四〇語、二八一字である。

以下例から調査結果をまとめながら、考察を加えていきたいと思う。

四、長文問題と短文問題

長文問題編のテストと短文問題編のテストの平均点(各回の生徒の得点の平均点をさらに平均したもの)は長文の方が七・七点、短文の方が六・八点と約一点の開きがある。一回一回の問題の難易の差もあるだろうが、生徒にとっては、長文問題の中で練習した方が覚えやすいということがわかる。これは長文問題編のテストの得点分布の中で、〇〇三点の低得点者が少ないことから言えるのではないか。

長文問題は長い文章の一節を抜き出したものから出題されており、全文から漢字の意味を類推することができる。これに対して、短文問題は問題文が十字〜二十字程度と短く、難解な漢字になると意味を推しはかることもできにくい。十四回の短文問題編の漢字テストの中で、生徒が意味をつかみにくいとされたものは次のようなものである。

- 1 イカク射撃(威嚇)
- 2 キジョウの空論(机上)
- 3 目上の人にキョウジュンの意を表わす。(恭順)
- 4 他人にクドクをほどこす。(功德)
- 5 銅像にロクショウが生じている。(緑青)
- 6 チョウモン客の焼香が行われる。(弔問)

7 古今集は最初のチョクセン和歌集である。(勅撰)

8 ハクシャ贈呈(薄謝)

9 夏は草木がハンモする。(繁茂)

10 彼はマンゼンとした話し方をする。(漫然)

どれも正答率が五十パーセント以下のものばかりであるが、必ずしも正答率の低いものすべてが、意味のわかりにくいものというわけではない。短文問題の中で意味がよくわからないと言われるものは、そのまま、短文内の出題されている漢字と、他の単語のつながりが生徒の内でもまだよく結びついていないものであるようだ。たとえば、2の「キジョウ」と「空論」、6の「チョウモン」と「焼香」、7の「チョクセン」と「古今集」などがそれにあたる。また、短文問題の中には他に「パキヤクをあらわす」「勝てば官軍、負ければゾクゲン」と言った慣用句をそのまま問題にしたものがあるが、これは理解されにくい傾向があるようだ。

漢字はそのものの難易もさることながら、それを含む文章の内容によってもその難易が左右される。適度な長さの文章の中で、意味が理解されながら、学習されることが最も望ましいあり方ということができる。ただ長文問題でも、文章の長さが長すぎると、どの部分から漢字の意味を推定するとか生徒にわかりにくい、むしろマイナスになることがある。中間、期末などの定期考査では二〇〇字前後の長文読解問題の中で、五問〜十問の漢字の問題を出題すると、きわめて正答率が低く、全く解答できないものがクラスの中で二、三人は出てくるのが普通である。このような点からいうと「漢字の学習」の長文問題編の六〇〇〜七〇〇字の出題文の中

で十題の漢字を書かせるというのは、かなり効果的であると言える。

さらに長文問題編では欄外に注が入っており、参考にもすることもできる。実際にはあまり利用されていないが、生徒は自分のわからない漢字につきあたった場合には時々見るといふ。漢字を学習する場合に、他の漢字と比較する、意味をつかむなどのポイントが加えられると効果的であるということがわかる。

以上のことから、実際に漢字を学ぶ、知るといふ段階では長文の中で考えながらやる方がいいし、短文問題ではむしろ、一度学んだものを練習するという形で使われるといいと思う。意味もわからない漢字を、丸暗記しても、日常生活では使用できないであろうし、語彙力も増加していくとは考えられない。高校生とはいえども、教師側が説明する、調べさせる、解説してあるものを与えるなどして、ある程度、説明をする機会を持つことが望ましい。

五、実態に即した漢字の難易度

今回、短文問題編の中から、一四〇語、二八一字にわたってその正答率を調査したわけだが、この正答率をまとめてみると、私がこんなに難しいものが書けるのかと思つたものが意外に書けていたり、あるいは逆にこんなにやさしいものかと思うような漢字が書けていなかったりすることがしばしばあった。私(教師側)が考えている漢字の難易と、生徒の実態から出てくる難易とにずれが生じていることに気がついた。これでは指導のポイントもずれているに相違ないと思つた。まず、その漢字の難易を正答率にしたがってまとめてみる。

《熟語単位》

正答率 (%)	熟語
0 ~ 9	なし
10 ~ 19	勅撰、税務署、憤慨
20 ~ 29	恭順、幻滅、功德、詔勅、緑青、搜索、折衷、繁茂
30 ~ 39	威嚇、飢餓、愚劣、傑作、宰相、遂行、征伐、晴耕、送迎、蒞謝、擁護、掲揚
40 ~ 49	謙虚、雇用、弔問、瞻写、漫然、誓約
50 ~ 59	不朽、協調、慶弔、護身、講義、諮問、鮮烈、阻止、忍耐、麦秋、帽子、傍聴、流布
60 ~ 69	割愛、寄生虫、机上、犠牲、郡部、酷暑、菜食、批准、沼沢、錠剤、打破、承諾、秩序、艦艇、廃藩、浪費、沸騰、策謀、零細
70 ~ 79	発揮、休憩、淡水魚、類型、投稿、儒学、主要、報酬、処罰、庶民、乗除、解体、落胆、転勤、過渡、凍結、返済、動搖、養蚕、清涼
80 ~ 89	巨額、刈(る)、新幹線、近視、鉱脈、真紅、質疑、需要、供給、鐘乳、屈伸、銑鉄、逮捕、帰途、政党、特殊、俳句、拍子、尾翼、舞踊、米価、保存、金融、内憂
90 ~ 99	敗(く)、半徑、軒屋(家)、好評、砂丘、財産、志願、実施、反射、縮図、昭和、途上、金銭、家族、脱衣、段落、町村、納豆、濃淡、漂流、早苗、包帯、連峰、連照、理由、郷里、一粒
100	産業、森林、庭園、軟式、検尿、理髮、幕府

※熟語の配列は「漢字の学習」の順序にしたがった。

これで見ると、全員が書けるものは一四〇語中わずか七語（五％）、反面、半分以上の者が書けない語は三十語（十一％）もある。漢字テストを行う前には必ず予告をし、範囲も決めておくので、たいていの生徒が前日に練習してくる。また数回やるうちにはヤマをかける生徒もいる。だから、白紙の状態でもっと正答率が低くなるはずであるし、実際には作文とかその他の文章を書く時に誤らせずに使えるものとなると、もっと数が限られてくるはずである。

正答率の低いものは、概して画数が多い。画数が多いものほど、覚えにくく、また点画を誤って書く率が高くなるためと思われる。また、その漢字以外に類似の形の漢字があるものも正答率が低い。「概」と「概」「既」「既」「啓」と「騰」などがそうである。それぞれの漢字は正確に書けるが、どの熟語にはどの字を使えばいいのかということが混乱している場合が多い。三番目に現在の日常生活ではあまり使われないので、生徒に意味、用法が理解されていないものが増えられる。たとえば「勅撰」「功德」「薄謝」など、生徒の日常生活のレベルからは離れているものである。ことばの意味、漢字自体の難易もあるだろうが、「麦秋」（ばくしゅう）など漢字そのものはやさしいが、使い慣れない、聞きなれないものなので正答率が低い。漢字の難易の問題には、生徒の漢字力の有無だけではなく、言語生活全体にかかわってくるものも含まれていると言えるであろう。

《漢字単位で》

「漢字単位で」と言っても、熟語の中でのつながりも入ってくるので、その漢字の正答率の高低が、そのまま漢字の難易にはならな

い。たとえば「護身」の「身」だけ書かせるとおそらくほとんどのものが正確に書けるだろう。しかし「護身」のことはそのものからならないために「身」をかけずに、「心」などと誤る者の数も入っている。

そこで調査の段階で「〇×」「×〇」の記号で表わせるもの、つまり熟語のうちの一字が書けていないものというのは、その漢字固有の難易にかかわっている場合が多いので、そのことにも留意しながらまとめてみた。

正答率 (%)	漢字
0 ~ 9	なし
10 ~ 19	署(稅務署)、撰(勅撰)
20 ~ 29	恭(恭順)、功(功德)、徳(功德)、詔(詔勅)、勅(詔勅)、緑(緑青)、青(緑青)、衷(折衷)、憤(憤慨)、概(憤慨)、繁(繁茂)
30 ~ 39	順(恭順)、傑(傑作)、幻(幻滅)、耕(晴耕)、搜(搜索)、迎(送迎)、帽(帽子)
40 ~ 49	嚇(威嚇)、掲(掲揚)、揚(掲揚)、飢(飢餓)、餓(飢餓)、折(折衷)、調(協調)、愚(愚劣)、劣(愚劣)、滅(幻滅)、雇(雇用)、幸(宰相)、略(諮問) 伐(征伐)、晴(晴耕)、遂(遂行)、索(搜索)、弔(弔問)、勅(勅撰)、啓(啓辱)、漫(漫然)、誓(誓約)

この表では、特に正答率が五十パーセント未満のものについて、どの熟語のどの部分にあたるかということを書き加えた。

正答率の低い漢字は、いくつかの傾向を持っている。一つは点画の誤りやすいものである。「繁」「搜」「迎」「帽」などがそうである。「繁」「搜」「迎」「帽」などの誤りがずいぶんあった。

二つめにその漢字の中のいくつかある読みの中で、使われる回数少ないものが出てきた場合である。「青」は「アオ」「ショウ」「セイ」などの読みがあるが、「緑青」では「青」を「ショウ」と読むため、漢字と音が結びつかないための誤りが多い。同じようなことが「緑」(ロク)、「功」(ク)などについても言える。三つめにあまり使われないために覚えにくいものがある。「弔」は「弔問」では40%49%、「慶弔」では50%59%と正答率が低く、他の漢字とのどんな組み合わせでも難しい字といえる。同じような傾向が見られるものに「勅」がある。「詔勅」では20%29%「勅撰」では40%49%と合わせて低い。おもしろいまちがいとして、調査で最も正答率の低かった「署」がある。「税務所」と解答した生徒がほとんどであった。固有名詞に近いものであるが、「税務」ではなくて、「警察」であれば「所」と書かなかったのではないかと思われる。

このように、一字単位で見えていくと、どのような漢字と組み合わせせてもほとんどの生徒が書ける字と、組み合わせようによっては書けない字と、どんな組み合わせでも書けないものと大きく分別することができるとはいえないか。今回の調査では、ほとんどの漢字が一度きりしか登場しないので、詳しいことは何とも言えないが、最も単純な例でいうと、「青」について「青空」「緑青」「刺青」など、

読み方も使い方も何が何とおりかの熟語を作ってテストしてみると、「青」という漢字そのものについての習熟度のはかれるのではないか。

このようにして考えてみると、点画、構造などかなり難しい漢字でも、日常使われる頻度が高く、読み、用法が限定されている場合は生徒は何とか書くことができる。これに対して、いくらか点画がやさしくても、読み、用法が複雑なものは、書きにくい。漢字の難易は点画そのものの複雑だけの問題ではないことが理解できる。

六、漢字の誤答の傾向

以上、見てきたように、生徒の漢字力というのは、ただ漢字をまちがわずに書けるか書けないかの問題だけではなく、漢字の持つ意味や読みや構造など、もっと漢字の本質的な問題にかかわっていることがわかった。

ここでは、生徒が、どのような誤りをすることが多いかをまとめながら、漢字指導のポイントのいくつかを考えてみたいと思う。漢字テストの平均得点(短文テストのみ)は、十四回の平均で六・九点である。平均して、十問のうち三問は何らかの形で誤って書く、あるいは全く書けないものである。どこがどのように書けないかということを知ることによって、それぞれの漢字の持つ盲点みたいなものを把握し、そこを指導することによって少しでも生徒の漢字力をつけ、また正確さ、厳密さを身につけさせたい。

まず、それぞれの漢字の誤答の中からいくつの特徴によって分類を試みた。

がうかがえる。これに対してへんを混同する場合は多い。「儀」と「犧」、「招」「沼」「紹」「排」「併」、「概」「慨」など典型的な例であろう。生徒が漢字のへんの持つ意味をよく理解していないということが出来る。「↑」なら心に関係した意味の漢字、「ㄥ」なら水に関係したもの、「言」ならことばや学問に関係のあるものなど、多少の例外はあるだろうが、大筋のところは説明して理解をうながすことが必要である。語源的なものを含めて、漢字独自の持つ意味や構造を指導する機会が必要であることを痛感した。次に(2)の中でもおもしろい現象が見えた。「難」と「勅」、「株」と「秩」という誤り方である。それぞれの漢字は意味的にも、構造的にも何ら関連性がない。ただ、ちよつと見た感じがよく似ているというだけである。これは(1)のところでも少し述べたが、生徒は、私たち教師が考えている以上に、漢字を「映像化」して見ているからであると思う。漢字を意味構造から考えながら見るのではなく、ある一種の、点と線からなる「模様」「図形」として見ているのではないだろうかと考えられる。これではたとえ、その「模様」と実際の用法が正しく組み合わせられ、日常生活に支障なく漢字が使えるようになったとしても、漢字の見方としては低次元であり、指導の必要性があると思われる。

(3)の意味の取り違いによる誤りは、果して意味の取り違いだけからこういう結果になったのかどうか疑わしい点もあるが、一つには問題の漢字と同じ音を持つ漢字をとにかくあてはめたためにおこる誤りがある。「滅滅」(幻滅)、「子用」(雇用)、「御心」(護身)などがこれにあたる。熟語全体の意味がわからないままに、漢字を

表音文字にみだてて使ったと思われる。また出題文の意図を誤解することによっておこるものもある。たとえば「不朽」は出題文では「フキユウの名作。」となっている。生徒はこれを「朽ち果てることのない永遠」の名作ではなく、「広く世に読まれている」名作と考へ、「普及」としたらしい。次にこれもおもしろい例であるが、その漢字が使われる状況の連想によって混乱する例がある。たとえば「罪」を犯すと「罰」を受けるので「処罪」(処罰)と書く。また、どこかで「遭難」すると「捜索」隊が出るので「遭索」(捜索)と誤り、「清涼」飲料水をよく飲むので「清料」(清涼)と誤るなど、生徒の連想のあとがうかがえる。漢字を、特定のことからや場面から連想しているということが言えると思う。

(4)の無解答による誤りは、数少ないが、他の漢字をあて字することさえもできないことはであるかもしれない。生徒はいくら誤りとは言っても、全く意味的にも関連性のないものをあて字することはまれである。何とか連想をめぐらし、同じ音で、意味的にもつながりのある漢字をあてようとす。「晴耕雨説」を「精行雨説」と答えた生徒は、一生懸命読書することを連想したのかもしれない。そのような連想さえも及ばなかった漢字とは、熟語そのものの意味がわからないもの「割愛」「飢餓」「弔問」など、読み方が他のどんな漢字にも見あたらないもの「流布」の「流るる」などである。また、日常使い慣れない「机上」、「麦秋」もその一種と言えるかもしれない。

七、高校生の漢字指導

今回の調査で一番感じたことは、やはり高校生にも本格的な漢字の指導が必要だということである。高校の国語の授業では、漢字そのものを取りあげて指導することは少ない。「漢字の学習」を利用して、ほとんどの県内の高校で漢字テストが行われているということとを前に述べたが、体系的な漢字指導の実践はあまり耳にしない。中には「クラス対抗漢字テスト」という例もあり、競争試験の形をとるところもある。

暗記中心、練習中心の漢字指導も一概に悪いとは言えない。問題なのは、どこで暗記させ、どこで練習させるか、どこで説明を加え、まとめさせるかということであろう。高校生の漢字力の低さは、彼らが小・中学校で学んできた漢字の入門期の指導に問題があると、もはや手離してはいられなくなってきた。

漢字の中でも特に点画の構成にポイントをおいて指導すべきもの、意味にポイントをおいて指導すべきもの、漢字の成り立ちや語源にポイントをおいて指導すべきものなど、漢字それぞれの性質によって、効果的な指導があると思う。どの漢字には、どのような盲点があるのか、それを生徒の実態に即して客観的に分析することによって、指導のポイントを見つけたいたい。また、漢字のへんやつくりのものつ意味、漢字そのものの持つ意味などを体系的に指導する時間を設けると、たとえば、漢文の中に出てくる難しい漢字に対しても、ある程度の読み取りができるようになるのではないかと思う。

具体的な指導法については検討中であるが、従来の反復練習法、暗記法に加えて、語源を用いて関心をうながす方法、類似の漢字を比較する方法などが考えられると思う。反復練習は、正確な点画、

構成を定着させるために行うべきであり、ただ無意味な暗記のために利用すべきではないと思う。

今回の調査でわかったことの一つとして、生徒の漢字テストに対する関心度のことがある。生徒たちは意外に漢字の練習を苦にしている。漢字テストはほとんど毎回の現代国語の時間に行ったが、生徒はほとんどの者が毎回、前日に練習をして来て受けていたようだった。また、漢字の正誤についてもかなり関心があったようだ。この関心をもっと暗記の方向ばかりでなく、漢字の体系的なものへと向ける必要があると思う。

一つ気がかりな点は、日常生活の中では、生徒の使う漢字の数が少ないということである。実際に自分で使うことばであるから、意味は理解できているはずなのに、平仮名で書くのである。たとえば、「批判」を「ひはん」、「集会」を「しゅうかい」と書くのである。これは、生徒の中に、誤った漢字を書くよりは仮名で書くほうが良いという意識があるからだと思われる。テストや作文の中で、誤字を使うと減点の対象になるということに対する生徒の自衛手段なのかもしれない。こういう意識も生徒の漢字力の向上を妨げている一つの原因であると思う。誤りを恐れずどんどん漢字を使い、誤りを指摘し改めていくという方向が取られなければいけないと思う。それは漢字テストだけでなく、ノート、作文、メモなど、さまざまなものの中で、不断に指導されなければならないであろう。教師が一字一字丹念に漢字を見、指導していかなければ、生徒の方も漢字一字一字をたいせつに学ぼうとはしないであろう。

八、おわりに

以前、私は漢字の問題は、国語の中でも基礎の基礎であり、書けて当たり前、書けるまで練習すべきだと思っていた。また、国語の基礎学力を論じる目安として必ず漢字の問題が提起されてきたこともあって、漢字の問題は、国語の土台みたいなものだという認識をしていた。そういう点は確かにあると言えるが、生徒の実態を見ると生徒のほぼ100%が書ける漢字と、20%にも満たないものしか書けない漢字があり、それらを総じて「基礎」の名のもとにつめこむのは早計であると思う。漢字の中にも、基礎的なものと高度のもの、応用を要するものがあり、「漢字」＝「基礎学力」とは言い難い問題をばらんでいる。

また、漢字の問題には、語彙の問題、読解の問題など、さまざまな領域の問題が内包されていると思われる。具体的な指導としてもそれらの領域と関連させながら、指導していかなければならぬ。国語そのものがそうであるように、漢字も日々の積み重ねから力をつけていくべきであろう。

今回の調査は初めてのこともあり、不備な点も多々あった。調査人数、回数共に少なかつたこと、漢字総数が少なかつたことなど顕著なものである。また、誤答の調査の方法は、誤答の傾向がうまくまとめられなかつたので次回の調査では検討したい点である。一回の漢字テストで十問、二十字程度の漢字しか出題できないが、漢字テストを重ねて、「漢字の学習」に収録されている漢字すべてについて調査すれば、「漢字の学習」に即して指導する場合の、指導の

ポイントや、その体系化など、何か得るところがあると思う。ぜひ継続してやってみたいと思う。

また、生徒に積極的に漢字にとり組ませるためのアイデアや工夫など、いくつも考慮しなければならぬ点があるが、一つには、漢字に慣れることによって恐怖感や嫌悪感を取り除き、日本語としての漢字のおもしろさや便利さを、少しでも生徒に理解させることができればと思う。

(香川県立小豆島高等学校教諭)